留学生の体験談

与論島の伯母のもとで与論高校を卒業した海君の体験・感想文

２０１５年春、僕は与論高校に通うことになった。鹿児島からいきなり島の生活だというのになんの抵抗もなかった。母が島の出身で、双子で顔もそっくりな千代伯母さんの家だからだ。しかも、一つ違いの妹みたいな百合がいるのだ。何となく鹿児島市内の高校でいい大学にいくための高校生活を送るより、サッカーもできて勉強ものびのびできる島の高校を選んだ。「島に行って３年間暮らしてみたら」と母がすすめたことも理由の一つだ。そんなわけで与論高校を受験し、それから僕の島の暮らしがスタートした。

受験勉強をしていた僕はまずサッカーでつまづいた。半年以上サッカーをしていないブランクで体力不足だった。部活以外でも走りこみをし、庭でボールを蹴って必死に追いつく努力をした。２年生になってやっとみんなと同じレベルくらいになった。その年に百合が高校に入学し、共に高校生活を過ごした。２年目には島の生活に慣れ、サッカーのボランティアで週２・３回海岸のゴミ掃除に早朝参加した。地図も目印もスマホもなく何度も道に迷って時間に遅れ、その度に島の母から三流男と呼ばれた。よく「一流の男になれ」と僕になんでもさせようとした。カマ１本持たせられ畑に連れていかれ一日中サトウキビ畑の草刈りをさせられた。メッチャきつかった。「センスがある。向いている」とおだてられたが、次からは絶対こんなきつい労働はしないと思った。次の日曜日は親戚の牛小屋に行って、牛の完熟糞を取りに行かされた。島母は完全フル装備。僕はスリッパに短パン。「何も教えず自分だけ」と言ったら、「仕事に行くのはわかってるのにヤル気のない人間はこれだから困る、三流男」と言われた。常に何をするかを自分で考え準備する事は仕事をする上で当たり前の事だと教えられた。

台風の時に「僕がここの家の世帯主だ、家を守る」と言ったら、島母は雨戸を閉めろと言ってきた。固くて動かせない僕に向かってまた三流男と言って、簡単に雨戸を閉めインパクトを借りてきて、コンパネという板にドリルでねじをうちこんだ。さらに３０kg の砂の入った土のう袋を担いで脚立を登り屋根まで運ぶ。島ではなんでも自分でしないといけないんだと思った。サトウキビの収穫のアルバイトで一日９時間、機械の後ろから畑を走り回って働いても普通に僕たちにごはんを作ってくれる。僕はひそかにおばさんのところじゃなくおじさん宅にきたんだと思うようになった。

鹿児島の母と生まれたときからライバルで、料理だけは負けないって気合いを入れて、おいしい食事をつくってくれた。今日はフランス料理だと言って、白い大きな皿にいろんな食材をならべ、「女子力が高いだろう」と僕たちに自慢する。ピクルス、セロリ、カボチャ、人参、島野菜でだしをとったスープを作ってくれた。ドレッシングやソースも手作りした。弁当時間前にプンプン教室中に臭うあつあつのカレーを作って配達したこともあった。僕は居候だからがまんしたけど、百合は「お前ん家は出前か」って言われて泣いたそうだ。

また、「電灯つけっぱなし・クーラーつけっぱなしだった」と文句のお手紙付き弁当もあったりした。でも読むのがおもしろかった。コツをつかんだら結構つき合いやすい島母だった。

でも２人で暮らすのはまっぴらだ。本当に百合がいて３年間暮らせたと思うことはいっぱいあった。百合の存在に感謝だ。本当の妹以上に妹だと思う。おかずが少ないと「１品たりない」っておこってくれたり、毎朝「カイ！ごはん」って起こしてくれて「勉強しない」って鹿児島の母に逐一報告してくれて、島母からかばってくれて、一緒に音楽聞いて。いつも会話が楽しかった。３年の大学入試に向けた勉強も千代おばちゃんと僕のなまけグセとがマッチして、「夜１０時になったら電気代がかかるから学校で勉強しろ」言われ、つらくなかった。

心と体が強くなり、かぜもひかず健康でいられた。高校生で判断力・決断力が身についたと思う。人生に失敗も無駄な努力もない、そこにいろんな可能性・選択肢があるって気づかされた。「この決断、この道でよかったと思える明日にしろ」っていつも言っていた。この

島は鹿児島と違って遊べなかったし生徒もまじめな人達ばっかりだったけど、自分なりに工夫して島でしかできないいろんな遊びをした。バイクにも自由に乗れた。いつも青くきれいな海で泳いだり魚釣りもした。「外めし」と言ってよく庭の芝生でバーベキューしたり、魚を炭で焼いたり、鍋したり、いっぱいの愛情を注いでくれた。学問じゃない勉強をたくさんした。「男はしっかり仕事しろ！」ってよく僕に言った。「ありがとう」とやさしい言葉を言うと泣き出しそうだから言わずに島立ちしたいと思った。

Ｙ建設のおじちゃん、おばさんの２人が鹿児島でたべられない食材、おかしをいつも僕に持ってきてくれた。外食にもよく連れていってくれた。節目節目にお祝い、励ましを受けた。絶対忘れない。いつか恩返しをしなくてはと感謝の気持ちを持つことしか今はできない。

高校の家庭科ののんちゃん先生ありがとうございます。千代おばちゃんは勝手にライバル視し、「若い家庭科の先生に負けない」って言っては自分のハードルを上げ、「おいしい！すごい！」の一言を聞きたくて、びっくりするくらい工夫したり努力してたような気がする。おかげでメシがうまかった。

すべてが思い通りの３年間ではなかったけど、ここにきてよかった。与論高校でよかった。いつも笑いがあった。いつでも帰ってこれる家を持てた。いい島親、かわいい妹だった。これからを生きていく上でいつもこの人たちを忘れる事はないだろう。誰にも経験できない絆を結んだ貴重な体験だった。つらい時うれしい時ヨロンに帰って来ようと思う。

【僕が島で学んだ事】
・サッカーでポジションがディフェンスだったので常に人の動きを見れる男になれた。
・ありがとうございますの感謝の心。人と人とのつながり・絆・たすけあい・思いやり。
・命が宝。健康と人が財産、豊かな心、たくさんのおいしい・うまい島の味、食の大切さ
・ころんでも次がある。なんでもできる。捨てる神あれば拾う神ありを知った。

【びっくりしたこと】
・島の方言がスペシャルわからなかった。２か国語だった
・お墓を新しくして先祖のお骨に出会った！僕のルーツに出会ったのはいいけどホントーにガイコツだった。マジでびっくりだった。
・僕が一緒に暮らしていたおばさんが実はおじさんだった？

【これからの自分】
・島で学んだ３年間で自分探しをして、何か島に恩返しができるような生き方がしたい。なりたい自分になりたい。結婚して子供が生まれたら、与論高校に通わせたい。

【大好きだったこと】
・サッカーをとことんできた事。気候も人もいつも僕にあたたかかった事。島の友達。
・鹿児島にいるときよりも祖父母がより大好きになった事。
・空気が風が海が空が人が大好きだった。ヨロンは僕にいつもやさしいメロディーを吹きこんでくれた！

最後に僕と千代おばちゃんとで遊び過ぎてしまった３年だったけど、「千代おばちゃん、百合、ありがとう」と言える男になるために、とことん上の学校を目指して、今度はいい結果を残して恩返しをしたい。

僕が与論に来た事を千代は幸福チケットをゲットしたって言ってくれた。鹿児島の母に、僕の子育てのたすきを渡したくないって今になって言う！それぐらいこの３年の絆は本当に深いものになった。別れは、つらいけど、次にむかってお互いこの絆があるから何があっても頑張れる。何に対しても心の一流をめざして頑張ります。３年間ありがとうございました。千代！百合！離れていてもどこにいってもおれたちはもう本当の家族だヨ！それでは鹿児島に行ってきます。

海より

＊注意　名前は全て仮名もしくはアルファベットで表記してあります。